

2022年2月15日

資料館通信 第80号

ふじみ野市立 上福岡歴史民俗資料館 埼玉県ふじみ野市長宮1-2-11 TEL 049-261-6065
大井郷土資料館 埼玉県ふじみ野市大井中央2-19-5 TEL 049-263-3111

星野仙蔵生誕 150 年記念特別展を開催

「資本主義の世界を拓く～ふじみ野の経済人たちと渋沢栄一のおゆみ～」

10月23日(土)～12月5日(日)

大河ドラマ、マスコミでも注目されている渋沢栄一と、郷土ふじみ野が生んだ経済人、星野仙蔵・神木治三郎・神木三郎兵衛たちが織りなすドラマ、日本の資本主義発達の歴史を展示で紹介した。



大井郷土資料館（第1会場）



十代目星野仙蔵写真
(衆議院議員時代)

(1) 今回の特別展で紹介した人々

○星野仙蔵

十代目星野仙蔵は、幼名を安太郎といい、福田屋九代目星野寅右衛門の長男として明治4(1871)年に生まれた。明治22(1889)年に笠幡村(現在の川越市)の有力者発智庄平の娘登美と結婚した。発智家は、後に黒須銀行経営や選挙活動などを通じて仙蔵と深い関係を持つことになる。明治27(1894)年に八代目仙蔵は隠居し、安太郎が十代目仙蔵を襲名して福田屋当主になった(このとき九代目は既に死去)。

仙蔵は大正6(1917)年、48歳で死去するまでに、回漕問屋福田屋経営を基礎に、銀行経営、鉄道建設を図り渋沢栄一とともに経済人として活動した。その他にも衆議院議員としての政治活動、日本画家橋本雅邦支援の文化活動、福岡明信館を基盤とした剣道家としての活動など、幅広い活動を展開した。

○神木治三郎

大正時代の『日本之精華』によれば、神木家は代々の素封家(財産家)で質屋を営んできたという。江戸時代に苗間村から浅草花川戸に出店するとともに当地に移住した忠三郎の子孫である。神木治三郎は、東京府議会議員を務めた神木保衛の三男で、明治3(1870)年に浅草で生まれた。治三郎は修行のために質屋で修業した後に中学校、高等商業学校(現在の一橋大学)に入学した。明治27年に西洋雑貨輸

入業を開業、明治 30 年から 40 年まで神木銀行を経営した。渋沢栄一とは銀行家として知り合ったと思われる。その後、一族で神木合資会社を設立し、会社は昭和初期まで存続していたと思われる。特別展開催後に確認された資料もあり、これからの資料の掘り起こしが期待される（本号 6～7 頁参照）。

神木三郎兵衛

神木三郎兵衛は勘左衛門家の八代目にあたり、天保 14（1843）年に生まれた。苗間村で金融業を営みながら明治 12（1879）年に苗間村戸長に、明治 17（1884）年に連合戸長制施行とともに大井町連合戸長に就任した。明治 19（1886）年に埼玉県議会に当選し、明治 22（1889）年の町村制施行とともに初代大井村長に推されて明治 30（1897）年まで務めた。

また明治 25（1892）年まで立憲改進黨に所属して村長を兼ねながら県会議員を務めた。在職中は教育の振興に取り組み、教員の招聘に私費を投じ、学校用地確保のために畑を無償貸与した。

○渋沢 栄一

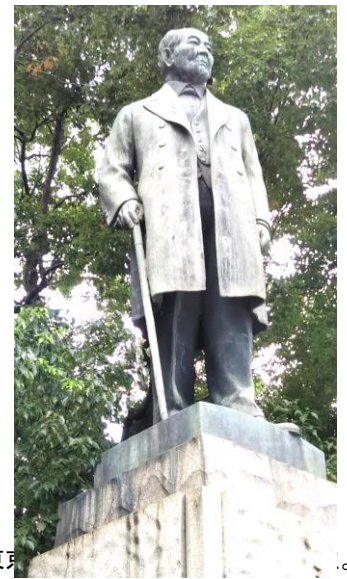
渋沢栄一は、天保 11（1840）年に武蔵国榛沢郡血洗島村（現在の埼玉県深谷市）の名主の家に産まれた。明治・大正期に活躍した日本の実業家で、財界指導者として「日本の資本主義の父」とも呼ばれる。

幼少の頃から家業の藍玉の製造・販売に携わるなど商売を憶えた。青年期には一橋慶喜に仕えていたが、慶喜が征夷大將軍就任すると幕臣になった。1867年のパリ万博の際にヨーロッパに渡航して発達した産業・経済を学ぶ機会を得た。明治維新後は新政府に仕え、民部省・大蔵省で紙幣（明治通宝）発行や国立銀行条例制定に関わった。後に政府主流派との意見の対立から辞職して民間の経済人としての活動を開始した。

栄一は、日本が欧米列強諸国と対等な関係を構築するためには民間で産業を興し、その発達を促進することが必要であるが、それには資本を集める銀行が必要であるという立場から、明治 6（1873）年に日本最初の国立銀行の第一国立銀行を設立した。その後も公益性のある経済活動を追求し、「道徳経済合一説」や「合本主義」を唱えて 500 以上の会社・事業設立に関わった。栄一の理想は著書『論語と算盤』に反映されている。埼玉県内では深谷に日本煉瓦製造株式会社の工場を設けたり、鉄道建設や銀行設立に関与するなど日本だけではなく地域経済の発展に努めた。星野仙蔵とは銀行経営・鉄道建設、神木治三郎とは銀行経営を通じてつながりを持っていた。



神木三郎兵衛肖像画



東京都内には多くの渋沢栄一像がある。

（2）上福岡歴史民俗資料館（第2会場）

上福岡歴史民俗資料館では、くらしの美というサブタイトルで、一階には登美夫人が仙蔵に嫁入りした際の打掛をはじめとして婚礼関連の資料を中近世コーナーのケースに展示し、二階に柄鏡、かんざし、くしなど服飾関係の資料や四十七士の盃、明治時代の洋風化を象徴するガラス食器、幕末明治期の磁器類を展示した。



松竹梅鶴亀牡丹繡打掛と三々九度の湯桶、盃

(3) 福岡河岸記念館 (第3会場)

河岸記念館の三階建て離れは、十代目星野仙蔵が明治30年代に政治・商業の接待用に「迎賓館」として建てられたもので、彼の経済人・政治家としての姿を象徴する建物である。今回の特別展では、離れをはじめとする建物を経済人が築いた歴史資料として展示するとともに、福田屋に集積された貴重な美術品を経済活動に基づく遺産として公開した。

仙蔵は多数の芸術家と交流し、元川越藩御用絵師出身で日本画壇の最高峰の一角を占める橋本雅邦を川越の商人・政治家たちとともに「画宝会」を結成して支援するとともに、作品の収集も行っていった。明治時代に挿絵や風俗画を描いて人気を博した尾形月耕^{げつこう}とも交流があり、彼が描いた桃太郎出陣図^{ふすま}の襖絵、月の海図の襖絵などが福田屋の表具として使われた。

仙蔵自身が七福神たちに美人画を見せる構図の「絹本着色星野仙蔵と七福神図」は、離れ二階の地床の間に飾られていたもので、仙蔵と月耕の関係や仙蔵の自意識を垣間見ることのできる貴重な資料である。また明治5(1872)年に払い下げられた川越城本丸御殿の杉戸4枚が福田屋の土蔵と主屋で建具として使用されていたが、そのうち2点を展示した。杉戸には、船津蘭山^{ふなつらんざん}による狩野派の独特の筆致による雄渾な龍図が描かれている。蘭山が川越藩松平大和守家の御用絵師として、幕末の嘉永3(1850)年から安政3(1856)年にかけて藩主の命令で作成したものである。



上 尾形月耕筆 星野仙蔵と七福神図
左 福岡河岸記念館文庫蔵展示会場
中央が船津蘭山筆の龍図の杉戸絵



尾形月耕筆 桃太郎出陣図 4枚で一つの場面を構成し、桃太郎、擬人化した猿と犬が同じ襖に描かれ、キジがその後ろについていく姿で描かれる。



船津蘭山筆 龍図
狩野派独特の筆致がうかがわれる。
★ポストカード販売中



尾形月耕筆 月の海図

ふじみ野と彰義隊

埼玉県からは、慶応4（1868）年5月の上野戦争で官軍に抵抗した彰義隊に多くの参加者を出し、ふじみ野市とその周辺にも様々な伝承が残されている。日本の資本主義の父と言われた渋沢栄一（現在の埼玉県深谷市出身）とその一族も、最後の江戸幕府将軍徳川慶喜とくがわよしのぶに仕える者として激動の歴史の渦に身を投じることを余儀なくされた。

慶応4年2月23日、幕府家臣や諸藩有志により江戸の築地本願寺で彰義隊が結成された。前年に大政奉還たいせいほうかんにより天皇・朝廷ちやうていに政権を返上し、寛永寺（将軍家祈願所、現在のの上野公園一帯）に謹慎した15代将軍の徳川慶喜とくがわよしのぶを守るためである。隊名は、「大義を彰（あきら）かにする」という意味であった。頭取（リーダー）には渋沢成一郎（渋沢栄一のいとこで幕府に仕える前は「喜作」と名乗った）、副頭取には天野八郎（現在の群馬県出身の幕府家臣）が投票によって選出された。4月11日、江戸城は官軍に無血開城し、徳川慶喜は上野から水戸へと退去して旧江戸幕府は完全に消滅した。彰義隊は、官軍に対して強硬な態度を主張する寛永寺僧侶の覚王院義観かくおういん ぎかん（現在の朝霞市出身）と結んで、寛永寺を拠点として江戸に残り続けたが、戦闘を回避したいとの慶喜の意志に従う渋沢成一郎と、徹底抗戦派の天野八郎とでは意見が合わず、彰義隊は分裂した。

成一郎は渋沢平九郎（渋沢栄一の養子）たちとともに飯能（現在の埼玉県飯能市）で振武軍を結成した。また、直真影流じきしんかげりゅうの剣豪間中龍吉けんごうまなかりゅうきち（現在の幸手市出身、後に福田屋十代目星野仙蔵ほしのせんぞうや亀久保明信館の三上大吉などを教える）も彰義隊から分かれて乳虎隊（後に龍虎隊を改称）を結成した。なお、渋沢栄一はフランスのパリ万国博覧会に出席しており、直接はこの事態に巻き込まれなかった。



彰義隊の墓
(東京都台東区上野公園)

上野戦争と彰義隊の墓

大村益次郎ますじろう（長州藩）が指揮する官軍10,000人は彰義隊1,000人を包囲し、5月15日早朝からアームストロング砲（最新鋭の大砲）を撃ちこみ戦闘が始まった（上野戦争）。戦闘は激烈を極め、官軍が発射した銃弾の跡が寛永寺黒門（荒川区円通寺に移転）に現在も残されている。1日で勝敗は決し、寛永寺は全山炎上し、彰義隊は200人以上の戦死者を出して四散した。彰義隊の遺体もしばらくは放置されたが、南千住の円通寺の僧侶により現在の西郷隆盛像さいごうたかもりぞうの北側の地で火葬された。円通寺に彰義隊士の墓は設けられたが、それとは別に明治14（1881）年12月に小川楯太すぎた（現在の埼玉県小川町出身、旧姓杉田後に興郷と名乗り、彰義隊の墓を守り続けた）、により上野の火葬の地に墓が建てられた。当時、彰義隊は明治新政府から「賊軍」とされたため、旧幕府家臣の山岡鉄舟やまおかてつしゅうが書いた墓碑も彰義隊の名前は無く「戦死之墓」とだけ記されている。



円通寺住職が明治初年に設けた彰義隊士の墓
後方は上野戦争の銃弾の跡が残る旧寛永寺黒門
(東京都荒川区南千住の円通寺境内)

上野戦争を逃れてきた人々

(1) 下南畑村の「おしゃくじ様」

富士見市下南畑には「おしゃくじ様」と呼ばれる石の祠ほこら（錫杖権現しやくじょうごんげん）があり、この地まで逃れてきた幕府旗本たちが官軍の岡山藩兵ほんべいに処刑されたという伝説が

ある。彰義隊壊滅後、治安維持のために出動した岡山藩兵は下南畑村で「難波田弾正」(虎千代)を名乗る徒党が村人に金品や食料を要求しているとの情報を得て急行した。伝承によれば徒党の中には彰義隊関係者がいたとされる。

弾正たちは捕まり、隣村との境に近いおしゃくじ様の場所で4人が斬首され、9人が銃殺された。明治2年、下南畑の興禅寺では弾正たちを供養するために、台座に処刑された13人の戒名が彫られた地蔵が建立された。

(2) 逃げてきた僧侶たち

上野戦争で炎上した寛永寺は、江戸幕府が創建した大きな寺院で多くの僧侶たちがいた。ふじみ野市や富士見市には上野から戦火を逃れた僧侶たちの伝承が残されている。

① 薬王寺の中村鶴乗

鶴乗は江戸の生まれで、6歳のときに寛永寺に弟子入りして覚王院義観の感化を受けたという。上野戦争で中福岡村(現在のふじみ野市)に避難し、薬王寺第十一世となったという。

鶴乗は後に教員となり、学校が暴風雨で被災したときは寺を学校として開放するなど、地域の教育活動に努めた。また、上野戦争を逃れた武士が官軍に処刑されたことを悼んで命日にはおしゃくじ様を訪れたという(出典:『福岡町人物誌』福岡町昭和44年)。

② 大応寺の福永智寿

富士見市水子の大応寺の住職には、おしゃくじ様で処刑された彰義隊の関係者がいたという。越後高田藩出身で、官軍が捜索に来たときは留守にしていたので無事だったという。また、大応寺には、おしゃくじ様で処刑された武士の関係者の女性が東京から追いかけてきて、処刑されたことを知って大応寺でその菩提を弔ったという伝承もある(出典:『ふじみの伝説・昔ばなし・資料編(二)』富士見市教育委員会 昭和50年)。

その後の彰義隊と関係者

上野戦争終結直後、5月23日に官軍(佐賀・岡山など西日本の諸藩と川越藩)の攻撃により振武軍は敗北した(飯能戦争)。渋沢平九郎は黒山村(現在の越生町)で自害、渋沢成一郎は脱出して新たに彰義隊を結成し、会津から箱館(函館)へと各地で官軍と戦い抜いた。成一郎は箱館で官軍に降伏して釈放された後、「喜作」の名前にもどり、渋沢栄一の勧めで実業家として日本の貿易を牽引する生糸産業の発展に努めた。渋沢栄一は、明治6(1873)年に渋沢平九郎の遺体を東京の渋沢家墓地に改葬し、平九郎自害の地を訪れるなど、養子であった平九郎を終生悼んだ。間中龍吉は彰義隊敗北後に龍虎隊を解散し、川越の剣道場明信館で星野仙蔵や三上大吉など、次世代を担う若い剣道家たちの指導に専念した。

彰義隊の結成から分裂、上野戦争、その後の出来事は、江戸から明治への時代の大きな変化に伴う「痛み」と「希望」を象徴するものであった。彰義隊関係者には埼玉県出身者も多く、現在でも私たちの身近な場所でその歴史の足跡を見ることができる。

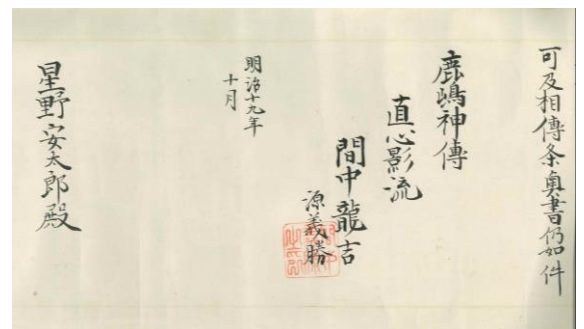


左 富士見市下南畑興禅寺の供養地蔵

右 難波田弾正たちが処刑された地にある錫杖権現(おしゃくじ様 写真提供:山野健一氏)



薬王寺(ふじみ野市仲3丁目)



明治19年 霊伝(市指定文化財福田屋文書)

元彰義隊士(後に龍虎隊)間中龍吉から福田屋十代目星野仙蔵(当時は安太郎)に伝えた直心影流剣術の極意を著した巻物(一部)

浅草の神木銀行を経営した人々

特別展で、苗間村出身で浅草花川戸に進出して神木銀行を開業・経営した神木一族について取り上げたが、不明な点も多く十分な紹介ができなかった。東京都公文書館所蔵の資料（カギかっこで表示）により、新たに判明した事実があるのでここに紹介したい。

①苗間村と浅草花川戸の神木家

神木家は、苗間村で金融業・醤油醸造業・舟運などにより経済的に成長し、寛政11（1799）年に川越藩御用達の商人になった。近世後期の文化年間（1804～1818）、勘左衛門家五代目の重右衛門が浅草花川戸に進出して店を構えて居住を開始した。文化5（1808）年に350両で浅草花川戸にて土地を購入し、苗間神木家と浅草花川戸神木家に分立する。時期は不明であるが、浅草寺の御用達商人10人のうち1人になった（『浅草寺日記』安政2（1856）年6月18日条）。

②神木忠三郎とその一族

幕末から明治・大正・昭和を駆け抜けた神木忠三郎とその一族のプロフィールについて紹介する。

○神木忠三郎（保衛）

特別展では生没年は不詳であるが、明治36年の記録により天保年間の生まれと思われる。江戸時代から経営していた舟運の規模を縮小していたと思われ、東京府から借用していた浅草河岸の土地を徐々に返却した（明治10（1877）年「回議録」）。金融業（質店）経営に専念するためかもしれない。明治11年から12年にかけて東京府会議員を務めた（明治12年「回議録第一類」）。このような活動を背景に明治13年に浅草神社（三社権現）の氏子惣代を務めるなど、地域の有力者になっていた（『上野東照宮組合明細』台東区教育委員会）。その後、明治14年12月、神木忠三郎、「保衛」と改名して長男源太郎が「忠三郎」を襲名した（明治14年「河岸地拝借替会議録」）。

明治30（1897）年、保衛は頭取として神木銀行（資本金20万円）を設立した。社員は次男信次郎、三男治三郎が務めたが、忠三郎（源太郎）の名前は見られなくなった。

○神木信次郎（保衛の次男）

信次郎は、『人事興信録』大正4（1915）年版によれば、明治元年10月生まれで、当時は本郷区駒込に居住して神木合資会社の社員を務めていた。大正4年には神木合資会社の清算人になっており、このころまでは会社は継続していたことが確認される（大正4年「河岸地」）。



神木銀行跡地（台東区浅草）

明治45（1912）年

神木銀行の位置（矢印）

と花川戸河岸・隅田川

（『東京市及接続郡部地籍地図』浅草区馬場道四丁目、花川戸町の頁より 柏書房 平成元年）

○神木治三郎（保衛の三男）

治三郎は、『人事興信録』大正4年版及び『日本之精華』（大正5年）によって略歴は判明しており、特別展にて紹介している図録を参照されたい。明治30年に親族とともに合名会社神木銀行を創業したが、明治40（1907）年に廃業した（『人事興信録』『日本之精華』）。明治43年に新たに神木合資会社を「無限責任社員」（『日本之精華』では「社長」）として設立して会社の最高責任者になった。この時点で保衛の名前は見えなくなっており、経営の実権は新会社設立と共に、治三郎を兄の信次郎と弟の猶之助が補佐する体制に移行したと思われる。

○神木猶之助（保衛の四男）

猶之助は明治6（1873）年生まれで、花川戸の北、隅田川に面した今戸に邸宅を構えていた。『人事興信録』昭和3年版によれば、職業は著述業とされている。絵画を好み、神木銀行解散後は「東洋古画道」の復興、「日本主義」を唱えて「神木鷗津」のペンネームで、美術評論誌『画断』（画断社）を発行した。

○その後の神木銀行

大正時代後期以降の神木一族と神木銀行の動向は不明で、神木合資会社があった浅草花川戸の地は大正12年の関東大震災、昭和20年の空襲で壊滅した。邸宅があった橋場も麹町元園（治三郎の邸宅所在地）も同様であった。このような経緯があり、現在、浅草の神木家の子孫は不明である。

神木銀行は、最初は「合名会社」、次いで「合資会社」になった。この2つに加えて会社組織には、「株式会社」の合計3種類がある（現在は「合同会社」がある）。これらの中で唯一、合資会社のみ設立には社員が2人以上必要で、「有限責任社員」と「無限責任社員」をそれぞれ1名以上選任する。「有限責任」は、倒産により会社が負債を負った場合に、出資した額を上限に責任を負うことで、「無限責任」とは全ての負債を債権者に返済する責任が生じることを意味する。合名会社・合資会社は、株式会社と異なり資本金が不要で簡単に設立できるが、「無限責任」という役割を負うことにより、経営者に多くのリスクを課した。資本主義勃興期の明治時代にはこのような様々な形態の会社が設立されたのである。

企画展・ミニ展示「日本の藍染め、プレインカの染織」

会期・会場①令和3年6月5日（土）～7月11日（日）；上福岡歴史民俗資料館

②令和3年9月25日（土）～10月10日（日）；大井郷土資料館

上福岡歴史民俗資料館では、7月7日（水）に資料館友の会機織り部会と共催の藍染体験学習にあわせて、企画展として、藍の栽培、県内に残る数少ない紺屋の藍液の建て方、「藍染め」の染め方や絞り方についての技術の貴重な写真を紹介するとともに、機織り道具、明治大正時代の縞帳から当時機屋で作られていた藍染めの反物の再現品を展示した。さらに特集として世界最古の藍染めを生み出した古代ペルーの染織の歴史について寄託品を展示した。また大井郷土資料館ではミニ展示として縞帳からの再現品と古代ペルーの織物を展示した。



7月7日（水）藍染め教室の風景



明治大正時代の縞帳からの再現品

ナスカ文化期（5世紀ごろ）の貫頭衣（ポンチョ）の展示

ふじみ野市の両資料館への資料の寄贈

令和3年3月から令和4年2月まで次の方々より、各種の文化財資料を寄贈していただきました。紙上をもって厚くお礼申し上げます。

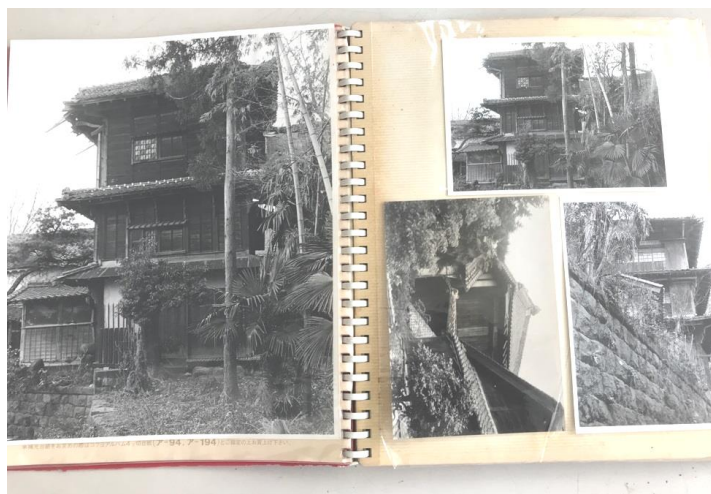
市立上福岡歴史民俗資料館分

令和3年

11月13日 古写真・フィルム（旧上福岡市域撮影）
（多量につき整理中）

名護市 小川喜美代氏

12月13日 福田屋古写真アルバム
戸沢利雄氏



◆福田屋古写真アルバム（見開き）

平成の大改修以前の福田屋の様子が多く記録される貴重なアルバムである。



◆福田屋古写真アルバム

市立大井郷土資料館分

令和3年

8月27日 12.7mm薬莖 1点
6.5mm弾薬 1点

市内 島田 守氏

12月16日 昭和40～50年代新聞記事切り抜き 36点

市内 横内 信子 氏



◆6.5mm 弾薬

薬莖の部分に日露戦争の激戦地「旅順」（中国東北部の大都市）の文字が彫られている。日露戦争勝利を記念した戦利品と伝えられるが、火薬は入っていない。



◆12.7mm 薬莖

太平洋戦争末期、亀久保にあった火工廠大井倉庫を狙って機銃掃射したアメリカ軍戦闘機が発射後に落としていった機関銃の薬莖である。

資料館通信 80号協力者一覧（五十音順 敬称略）

発行に際して上記の寄贈者とともに、次の方々・機関にご協力いただきました。

中村 義昭 原 太平 早坂 廣人 三上 栄一 山野 健一

幸手市郷土資料館 東京都公文書館 富士見市立難波田城資料館 薬王寺